テイル形の従属性

―― 語りにおけるテイル形の機能 ――

柳沢浩哉

0

テイル形の典型的な機能はアスペクトの表示であるが、テイル形にはアスペクト的意味では説明できない多くの意味・用法がある。筆者は前稿[1]において、テイル形の様々な非アスペクト的用法に対して、報告性という意味から統一的な説明を試みた。しかし、テイル形の用法には、報告性によってもとらえきれないものが残されている。本稿は、永尾章曹氏の研究成果をもとに、テイル形が叙述を前提化する機能を持つことを指摘する。そして、従来、経験と呼ばれてきた意味がこの機能から生まれていること、更に、経験のバリアント（変異形）としてテイル形が予告機能を持つことを明らかにする。

1　感応表現と解説表現

永尾章曹氏は、小説の文章の詳細な分析をとおして、感応表現と解説表現という二つの特徴的な表現形式を抽出している。永尾氏は、文を基本単位とする従来の文法研究を批判し、文法は生きた文章の中でしかとらえられないと主張する。日本語をテクスト言語学的手法によって分析した草分け的研究者の一人である。氏の研究は、文法形式の選択原理を、文を越えた単位の中で解明していることに特徴があり、その成果には、特に用法の面において数多くの貴重な発見がある。本稿では、永尾氏の研究成果の中から、テイル形に関係するものとして、感応表現と解説表現の二つを取り上げる。

まず永尾氏は、事件の話をする文章（語り）を対象に選び、その中での時間の流れに注目する。そして、語りの中には二種類の時間があり、その二つは異なる表現形式によってそれぞれ叙述されることを指摘する。[2]

事件の話をする文章は、こうして、事件という外界に従う一面と、話し手自らの意思に従う一面との二面の総和として具現する。

簡単に言えば、出来事の叙述と説明の二つである。出来事は時の経過に従って叙述されるのに対し、説明は出来事の時間から自由である。そのため、出来事を叙述した文はその前に「一分経って」のような、時の経過を表す言葉を入れることができるのに対し、説明の文はそのような言葉を入れることができない。両者はこの点から客観的に区別することができる。永尾氏は、このうち説明に当たる部分に、感応表現と解説表現の二種類があることを指摘する。まず、感応表現について、永尾氏の用例を借りながら説明してみたい。[3]

(1) 雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照していました。どちらを見てもかぎりない、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。なんという、さびしい景色だろうと、人魚は思いました。(小川未明『赤いろうそくと人魚』)

(2) 塩屋、舞子の海岸は美しかった。夕映を映した夕なぎの海に、岸近く小舟で軽く揺られながら、胡座をかいて、網をつくろつてゐる舟頭がある。白い砂浜の松の根から長く網を延ばして、もう夜泊の支度をしてゐる漁船がある。謙作は楽しい気持ちで、これらを眺めてゐた。(志賀直哉『暗夜行路』)

(1)(2) では、視覚的にとらえられた風景の叙述があり、その後にその風景に触れた登場人物の感情が述べられている。このように、感情の叙述とそれを導く情景の叙述とがセットになった表現が感応表現である。そして、この二つの例に見られるように、感情を導く情景の叙述においてテイル形が現れる。ただし、情景の叙述は風景だけに限らない。次の例は筆者が採集したものである。

(3) 部屋に入ると、相変わらず三人はもとの姿勢で仕事をしていた。いや、嘱託の老人だけは仕事とはいえない。彼は一心不乱に手帳に小さな字を書込んでいた。新聞の上と手帳の上に交互に首を振っている。彼の労働の内容が無目的で空疎なだけに、その真剣な首振りのリズムが田杉にたまらない焦燥を与えた。(発作)

このような例から、感応表現は (4) のように広くとらえておく必要があろう。

(4) 感応表現はａｂ二つの部分からなる。

　ａ　感情を動かすきっかけとなった対象の叙述。

　ｂ　感情の叙述。

　ａではテイル形が使われる。

次に、解説表現を、同じように永尾氏の用例を借りつつ説明したい。[4)]

(5) 翌朝信太郎は祖母の声で目を覚ました。「６時すぎましたぞ」驚かすまいと耳のわきで静かに云つて居る。(志賀直哉『或る朝』)

(6) 黙つてゐる彼を「さあ、直ぐ」と祖母は促した。「大丈夫。直ぐ起きます。彼方へ行つてて下さい。直ぐおきるから」さう云つて彼は今にも起きさうな様子をしてみせた。祖母は再び出て行つた。彼は又眠りに沈んで行つた。「さあさあ。どうしたんだつさ」今度は角のある声だ。(志賀直哉『或る朝』)

下線部が解説表現であり、それぞれ前の文に対する解説となっている。解説表現はその文末の形式に特徴がある。解説表現の文末は、テイル形もしくはデアル (場合によってはダ) のいずれかであり、タ形（動詞＋タ）が見られないのである。(5)(6) において出来事（人物の行動）を描写した文の文末はいずれもタ形となっており、これらと解説表現は明瞭な対比を見せている。解説表現の例をもう一例引いてみよう。次の例は筆者が採集したものである。

(7) 課長が田杉を呼んだ。声がいつもと改まっていた。田杉が立って行くと、ぶよぶよ

とたるんで女のように色の白い課長の皮膚はこわばっていた。彼は一枚の新聞を突出し、小さな写真を指で叩いた。「この写真を一昨日、整理が借りにきたとき、君は知っていたかね？」課長の声はとがっていた。田杉は課長の剣幕に、何事かとのぞきこんだ。昨日の朝刊だが、写真は渡米するという某代議士の顔であった。あまり有名でない代議士で、記事の説明で合点するくらいであった。「この写真がどうかしたのですか？」田杉は反問した。「どうかしたではない。写真の顔が違っているんだ。いま、整理部長から抗議をうけた」田杉はさすがにおどろいた。(発作)

下線部の解説表現の文末はいずれも、テイル形あるいはデアルとなっているのに対し、それ以外の文の文末は、「課長の皮膚はこわばっていた。」の文を除きタ形である。[5]

本章の内容をテイル形に注目して、次のようにまとめておきたい。語りにおける説明的な叙述は感応表現か解説表現のいずれかに該当する。

(8) 語りの中で、出来事を叙述した文の文末はタ形となり、説明的な文の文末はテイル形となる。

解説文が名詞文の時、文末はテイル形ではなくデアルになるが、煩雑になるのを避けるため、動詞文に対象を限定して(8)のようにまとめておく。

2 文脈起こし

語りにおけるテイル形のもう一つの特徴的な用法として、永尾氏が文脈起こしと名付けた用法がある。

(9) 伊豆半島の年の暮だ。日が入つて風物総てが青味を帯びて見られる頃だつた。十二三になる男の児が小い弟の手を引き、物思はし気な顔をして、深い海を見下ろす海岸の高い道を歩いてゐた。弟は疲れ切つてゐた。子供ながらに不気嫌な皺を眉間に作つて、さも嫌々に歩みを運んで居た。(志賀直哉『真鶴』)

(9)は事件の始まりを描いた部分である。ここでテイル形が使われている。永尾氏は(9)について次のように述べている。[6]

ここで大切なことは、これを基点として、話が始まるということである。そして、「動詞＋ている」のある文は、こうして文章のはじめに用いられることはしばしばであるが、他のところでは、わけもなく用いられるというようではないように思われるということである。「動詞＋ている」は、まず話の基点として用いられているようである。これを文脈起こしと呼ぶことにする。

文脈起こしが典型的に見られるのは作品の冒頭である。次の(10)(11)も永尾氏が挙げている例で、いずれも作品の冒頭である。[7]

(10) 或日の暮方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。(芥川龍之介『羅生門』)

(11) 或る雪上りの午前だった。保吉は物理の教官室の椅子にストオヴの火を眺めてゐ

た。

（芥川龍之介『寒さ』）

ただし、作品の冒頭や事件の始めの叙述の全てがテイル形となるわけではない。(12) のようにタ形で始まる例も多い。(12) は芥川龍之介『トロッコ』の冒頭である。

(12) 小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始ったのは、良平の八つの年だった。

良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を――といったところが、ただトロッコで土を運搬する――それが面白さに見に行ったのである。

文脈起こしを次のようにまとめておこう。

(13) 作品の冒頭や事件の始めの叙述にはテイル形が高い頻度で現れる。

3 テイル形の従属性

本章では、ここまでに得られた (8) と (13) とを統一的に説明してみたい。

(8) 語りの中で、出来事を叙述した文の文末はタ形となり、説明的な文の文末はテイル形となる。

(13) 作品の冒頭や事件の始めの叙述にはテイル形が高い頻度で現れる。

まず、語りの一般的な形を考えてみよう。語りとは事件の話をする文章である。従って、語りの核となるのは出来事の叙述である。一方、説明も語りにおいては不可欠な構成要素であるが、説明は語りの核となることはない。なぜなら、説明とは出来事の叙述を補うものであり、出来事を補う形でしか存在できないからである。言葉を換えれば、語りにおいて、説明の叙述は出来事の叙述に従属するのである。そして (8) によれば、タ形とテイル形とは、それぞれ出来事の叙述と説明の叙述とに対応している。ここから、語りにおけるタ形とテイル形との関係は、(14) のように、従属と被従属という観点からとらえることができる。

(14) 語りにおいてテイル形は自立性が低く、タ形に従属する。

従属的なテイル形は、タ形の前に現れる場合と後に現れる場合の両方がある。後に現れるのは、タ形で叙述した内容を補足する場合であり、これが解説表現である。一方、タ形の前に現れるのは、タ形の叙述を導くための前提となっている場合であり、(13) の文脈起こしは、後者が具体化したものの一つなのである。出来事を叙述するためには前置きが必要であるために、作品の冒頭や事件の始めの叙述には高い頻度でテイル形が現れるのである。文脈起こしをこのようにとらえれば、冒頭にタ形とテイル形の両方が見出されることも説明できる。タ形は自立性が高いため、どのような場所にも単独で存在できるからである。次の例は作品の冒頭であるがタ形で始っている。

(15) 伊村は、冬のはじめ、足かけ四年ぶりに九州のK市に帰った。だが、家があるわけではなし、親類もなし、旅館に泊つづけであった。

久しぶりだったので伊村は忙しかった。友達と会ったり、知人と会ったりして、朝、

旅館を出ると夜でないと宿に戻ってこない。一回か二回は出先から電話で旅館に連絡していた。(点)

テイル形による前置がないことが、テンポの速さやスピード感といった効果を上げていることが見てとれよう。

テイル形がタ形の前に現れるもう一つの形式が感応表現である。感応表現とは次のようなものであった。

(4) 感応表現はａｂ二つの部分からなる。

ａ　感情を動かすきっかけとなった対象の描写。

ｂ　感情の描写。

ａではテイル形が使われる。

ａはｂを導くための前提である。そして、例文の(1)(3)に見られたように、ｂにおいてはもっぱらタ形が使われる。つまり、出来事の叙述であるｂを導くために、ａがテイル形によって叙述されるのが感応表現なのである。[8] 解説表現、感応表現、文脈起こしは、仮説(14)によって統一的に説明できるのである。次章では、(14)に示した仮説を使って経験と呼ばれるテイル形の意味を考えてみたい。

4　経験

経験はテイル形の中でも問題の多い意味である。経験のとらえ方には、研究者によってさまざまな違いがあるが、(17)や(18)のようなとらえ方が一般的なものであろう。

(17) 過去に実現した運動が現在の状態になんらかのかかわりをもっていることを表している。[9]

(18) ～テイルの既然の結果の存在という中心的意味が、文脈の支えによって、現在のある事態を、過去のある既然（完了）の事象と結びつける表現として理解されるのだと考える。（中略）単なる過去形も、回想を表すことがあるわけだが、～テイルの場合は、過去の事実の意義・意味を考える心理の反映である点が特徴的である。[10]

このようなとらえ方は表層的なもので、タ形による経験とテイル形による経験の本質的な違いを言いあてているとは言い難い。両者の違いを客観的に抽出するためには、文法体系の中でのそれぞれの位置を明らかにしなくてはなるまい。筆者は前稿において、報告性という観点から経験を把握することを試みたが、本稿では、さらに別な角度から考察し、経験の本質を明らかにしてみたい。

寺村秀夫氏は経験の現れる頻度の高い場面を次のように述べている。

(19) 推理小説で、事件の当事者が、過去の事実を前にして推理を働かせる場面とか、文学史、作家研究などや、スポーツ、囲碁将棋の記録、解説記事などで、過去の事件を改めて吟味し、その意義づけを行なおうとする場面にひんぱんに現れる。[11]

それでは、過去の事件を吟味したり意義づけを行う場面でなぜテイル形がひんぱんに使わ

れるのか。経験の本質が明らかにされれば、この問いにも自ずから答えられよう。まず、経験の用例をいくつか挙げてみる。用例はいずれも推理小説のものである。

(20) 殺人・放火の立証が完全に成立したら、文句なしの死刑でしょう。しかし、今も言ったとおり、放火の点が立証できない。また、殺人の方も直接証拠がないうえ、本人も最後まで否認しているんです。ですから、他の証人たちの言うことしかわからない。それに、死体もあがっていない。そういうようなことで、結局、懲役十二年になって網走に送られたんです。(D)

(21) (筆者注：刑事が容疑者を尋問している場面)

「古賀吾市の話によれば、本年十一月に（中略）バス旅行があった。それは君の文学的将来を激励する会だったが、途中の昼食の休憩中に、そこへ来た芝犬に君は石を投げつけた。君のその行動は異常なくらい神経質だったと古賀は言っている。」「古賀君がどうして、そんなことを言ったかわかりませんが、私はただ弁当を食べてあさって歩く犬がうるさいので、それを追い払うつもりで石を投げただけであります。」「その犬は芝犬である。その海岸地から約二キロばかり南の山間部にある菅原地区の農家の飼犬である。君は、その芝犬に見おぼえがあったのではないか。」(場面)

(22) (筆者注：刑事が容疑者を尋問している場面)

「君はその車に女を乗せて菅原地区を通ったのではないか。」「そういう事実はありません。」(中略)「益田さくの証言によると、そのとき車の後部座席には年齢二十五・六位の女性が一人乗っていたが、真野信子の写真を見せると、その写真の顔によく似ていると言っている。」「私には関係ありません。」「益田さくの証言によれば、その車は村道を篠崎地区方面へ走って行ったが、約一時間後には引返して、県道を国道三号線へ走り去った。そのとき、車には、女性の姿が無かった。しかも篠崎地区にその車もついていなければ、女性も降りていない。君は真野信子を何処に埋めたのか。」(場面)

まず、(22) の中の「しかも篠崎地区にその車もついていなければ、女性も降りていない。」の文を例に考えてみよう。これは、次のようにタ形で表現することが可能である。

(23) しかも篠崎地区にその車もつかなかったし、女性も降りなかった。

永尾氏が指摘しているように、語りの中でテイル形の存在できる場所は限られている。ここで述べているのは過去の出来事であるから、テイル形ではなく (23) のようにタ形で叙述されるべきであろう。にもかかわらず、(22) がテイル形によって叙述されているのはなぜなのか。ここで仮説 (14) を思い出していただきたい。

(14) 語りにおいてテイル形は自立性が低く、タ形に従属する。

経験はテイル形のこの性質を利用した用法なのである。(22) では本来タ形で叙述されるべき出来事をテイル形で叙述することによって、その叙述を単なる出来事の叙述ではなく、前提の意味を持った叙述に変えているのである。すなわち、「しかも篠崎地区にそんな車もついていなければ、女性も降りていない。」が、容疑者の殺人を導くための前提となってい

るのである。もちろん、(23)のようにタ形のままでも、これが後続に対する前提となっていることは文脈からわかるが、テイル形を使うことによって、次の二つの効果が得られる。一つは、後に結論部分の来ることの予告であり、もう一つは、それによる結論部分の強調である。(17)(18)に述べられているように、従来、経験はテイル形の付いている叙述を強調する用法であると考えられてきた。しかし、経験はテイル形の付いている叙述を強調する用法ではなく、テイル形の後に来る結論部を強調するための用法なのである。そして、修辞的な色彩の強い用法であるとも言えよう。(20)～(22)の下線部は全て、後続を導くための前提となっている。(20)において「否認しているんです」は「ですから、他の証人の言うことしかわからない」を導くための前提であり、「死体もあがっていない」は「結局、懲役十二年になって網走に送られたんです」の前提、(21)では「古賀」の証言が「君は、その芝犬に見おぼえがあった」を導くための前提、(22)では「益田さくの証言」が容疑者が真野信子を埋めたことを導くための前提である。

また、(21)を見ると面白いことに気付く。刑事が「君のその行動は異常なくらい神経質だったと古賀は言っている。」とテイル形を使っているのに対し、それに答える容疑者は「古賀君がどうして、そんなことを言ったかわかりませんが」とタ形で答えている点である。この場面で、刑事は、古賀の証言が犯罪を立証する証拠となることを確信しているのに対し、容疑者は、そうなることを何としても避けたい。そのため、刑事が前提を強調するテイル形を使っているのに対し、容疑者はタ形を使っているのである。ここでは特に、テイル形をタ形で言い換えている容疑者のせりふに、容疑者の心理がよく表現されていると言えよう。

経験とは、次のように定義されるべき用法である。

(24) 経験とは、語りにおいて出来事をテイル形で叙述することにより、前提としての意味を持たせる用法である。そして、経験は、後に結論が来ることを予告し、その結論を強調する効果を持つ。

従来、経験は「現在とのつながりにおいて過去の出来事をみる」という点に重点を置いて理解されてきたようである。このようなとらえ方は先に引用した(17)(18)にも見ることができる。しかし、経験をこのような観点からとらえるのは誤りである。(20)～(22)の用例では、いずれも過去の出来事とのかかわりにおいて経験が現れている。従来は、語りという視点ではなく、アスペクトという視点から経験をとらえようとしてきたため、このような誤解が一般化してしまったのであろう。

(20)～(22)の例はいずれも、導かれるべき結論が文脈中に明示されていたが、経験の中には、そのような結論が明示されていない例も多い。しかし、そのような例も(24)によって説明することができる。まず、次の例で考えてみよう。

祖母から電話がかかってきた。父親が受話器を置くと、話の内容を知りたい家族は、父親に次のように聞く。

(25)　おばあちゃん、何て言ってた？

この場合、テイル形で聞くのが普通であり、(26)のようにタ形を使うとやや不自然な印象を受ける。

(26)　おばあちゃん、何て言ったの？

それに対して、次のような場面でテイル形が使われることはない。

Aの言葉によって、B子がひどく傷付けられた。それを知った、B子の友人CがAを詰問する場面である。

(27)　おまえは、彼女に何て言ったんだ。

この時、(28)のようにテイル形が使われることはない。

(28)　おまえは、彼女に何て言っていたんだ。

(25)と(27)の違いはどこにあるのか。両者の違いは問いの対象にある。(25)で家族が期待しているのは、祖母の言葉の正確な反復ではない。祖母の話の要約、あるいは祖母の話から推測されること、たとえば祖母やその家族の様子などである。つまり、(25)で知りたいのは、祖母の言葉を前提としてそこから得られる情報である。一方、(27)では、Bの言った言葉そのものが問題なのであり、Bの言葉そのものが問いの対象である。つまり、前提から導かれる結論が文脈中に明示されていない場合でも、出来事を前提としてとらえる場合にはテイル形が使われ、前提としてとらえない場合には、タ形が使われるのである。ちなみに、(25)でも、たとえば話が遺産相続の問題で、祖母の言葉の一字一句が問題となる場合は(26)のようにタ形が使われるであろう。(26)について「やや不自然な印象を受ける」と曖昧なコメントをしたのは、状況によって質問の対象が変り、タ形が選択される場合があるためである。(25)の類例を一つ挙げてみよう。

(29)　「この前みえた、坂口さんという静岡県の女のかたが、先ほどまでここに待っていらっしゃいました」「え、また来たのかい？」坂口みま子が再び伊豆大仁から上京したらしい。伊瀬は惜しいことをしたと思った。また彼女は、何か特別な霊感でも働いて、それを告げにやってきたのかもしれない。もう少し早く帰れば会われたのにと思った。「で、彼女は今日、伊豆に帰ると言っていたかい？」「さあ、それは知りませんけど、また明日みえるそうです。二時間ばかり待っておられたんですけれど、ほんのひと足違いでしたわ」伊瀬は、明日やってくるに違いない坂口みま子に会うのが愉しみになった。(D)

(29)には、テイル形に導かれるべき結論部は明示されていない。ここで話し手（伊瀬）が知りたいのは、彼女の言葉そのものではなく、彼女に会えるか否かということである。これは、会話の内容を前提として、そこから読み取れることである。そのため、下線部でテイル形が使われているのである。(29)では、彼女に会いたいという話し手の気持ちが読み取れるであろう。

次の例は、これまでに挙げた経験の例とは多少異なっているように見える。

(30)　これより一週間前の七月六日に宮沢内閣が閣議で了承した国連安保理事会の改革に対する意見書を取り挙げ（中略)、姿勢の変更を求めると彼らは、この申し入れで執行部を突き上げていた。

さらに七月十四日には、これと同じ趣旨の要請を、社会党指示基盤のひとつであるＪＲ総連が山岸連合会長に提出している。この事実はあまりマスコミで報じられなかったが重要である。（中略)

これらの動きは、一見、別々のようにも見えるが、実は同根である。（非自民）

(30) では、二つの過去の事件が挙げられ、その後、その事件の意味が検討されている。これを図式化すれば (31) のようになろう。

(31)　過去の事件→ その意義の検討

これに対して、(24) に示した関係は (32) のようなものである。

(32)　前提としてとらえられた出来事→ 結論

しかし、(31) と (32) とは矛盾するものではない。(31) は (32) のバリアント（変異形）の一つである。本章の始めに、寺村氏の説明を受ける形で、過去の事件を吟味したり意義づけを行う場面でなぜテイル形がひんぱんに使われるのかという疑問を提出しておいたが、その理由も (24) によって説明できるのである。

5　予告機能

最後に、テイル形の予告機能について検討したい。本稿ではこれまで対象を語りに限定してテイル形の意味を考えてきたので、これまでのテイル形はいずれも過去の事象の叙述に使われたものであった。しかし、ここで考察するのは未来の事象の叙述に使われているテイル形である。

(33)　それでは、図書館で勉強しますので。

(34)　それでは、図書館で勉強していますので。

(33) (34) はともに、「話し手がこれから図書館で勉強する」という内容を伝えているが、聞き手に対する配慮、あるいは言外の意味という点において異なっている。(33) では、話し手が聞き手と図書館で再会することを考えていないのに対し、テイル形を使った (34) では、話し手が聞き手と図書館で再会することを予想あるいは期待していることがわかる。言語行為論的に言えば、(33) は「もう、お引取ください。」という意味であるが、(34) は「図書館に来て下さい。」という意味である。

(35)　何かあったら呼んでください。ここでワープロを打っていますので。

これをル形を使って言い換えると不自然な文となる。

(36)　？何かあったら呼んでください。ここでワープロを打ちますので。

テイル形のこのような用法は谷口秀治氏が明らかにしたものであり、谷口氏は待ち合わせの用法と命名している。[12] しかし、テイル形のこのような用法は待ち合わせだけに限定さ

れるものではない。

(37) 畜生、覚えていろ。

(38) よし、今に見ていろよ。

(37)(38) も谷口氏が待ち合わせの例として上げているものである。しかし、(37) と (38) は待ち合わせには限定されない。この二つはともに、相手に対する復讐を予告した文である。そして、この場合の復讐は相手に出会わなくとも実行できる。たとえば (38) では相手を見返してやるという形の復讐も考えられるが、その場合、相手に再会する必要はない。これらが述べているのは、相手に不利益をもたらす事態の予告である。もちろん、テイル形が予告する内容が相手にとって不利益なものに限定されることはない。

(39) 立派な社会人になってみせるから、見ていてね。

(39) のような文も可能である。これらの用例に共通しているのは次の点である。テイル形によって未来の事態が叙述される。そして、そこでは、その事態が継続している間に、更に別な第二の事態が生じることが予告される。テイル形のこの機能を (40) のようにまとめてみる。

(40) テイル形が未来の事態の叙述に使われた場合、直接言及されていない何らかの事態の発生を予告することがある。[13]

(40) は、(14) において述べたテイル形の意味が語りだけに限定されないことを示している。

(14) 語りにおいてテイル形は自立性が低く、タ形に従属する。

テイル形が (40) において、何らかの事態の発生を予告するのは、テイル形の付いた叙述が前提となるからに他ならない。つまり、テイル形が叙述に前提としての意味を持たせるため、その叙述が単独では存在できなくなり、前提を支える何らかの事態が必要となる。これが、直接言及されていない事態の予告として現れるのである。ここから、(14) に述べたテイル形の性質は、タ形との対立においてのみ見られる限定的な性質ではないことが分る。(14) を、より一般化して次のように改めてみる。

(41) テイル形は叙述に前提としての意味を持たせる機能を持つ。その結果、テイル形は前提を支える非テイル形の叙述を要求する。

テイル形に (41) 意味を仮定することにより、(40) の予告機能と (24) の経験とはともに (41) のバリアントとして平行的にとらえることができる。

(24) 経験とは、語りにおいて出来事をテイル形で叙述することにより、前提としての意味を持たせる用法である。そして、経験は、後に結論が来ることを予告し、その結論を強調する効果を持つ。

(41) が過去の事象の叙述において現れた場合が経験であり、未来の事象の叙述において現れた場合が予告機能となるのである。

従来、テイル形はアスペクトというカテゴリーの中で研究されてきたが、語りもテイル形を解明するための重要なカテゴリーの一つである。本稿では、永尾章曹氏の研究成果を

使って、テイル形の従属性という観点からテイル形の意味を考えた。本稿の従属性という考え方は、ドイツの言語学者ヴァインリヒ (Haraid Weinrich) の時制論の考え方を応用したものである。[14] 筆者は、テイル形のアスペクト的意味と非アスペクト的意味を統一的にとらえることを最終的な課題と考えている。本稿は、前稿とともに、その最終的な課題に至る過程の一部であると考えていただきたい。

注

1) 拙稿「テイル形の非アスペクト的意味—テイル形の報告性—」(『森野宗明教授退官記念論文集』(1994 (印刷中)、三省堂)
2) 永尾章曹編集『日本語学』(和泉書院、1992) p. 125
3) 永尾章曹編集『日本語学』に引用されている用例である。(p. 121)
4) 永尾章曹編集『日本語学』に引用されている用例である。(p. 116)
5) この用例は、拙稿 (注(1)) における報告性によって説明できるテイル形の用法である。
6) 永尾章曹.「「動詞＋ている」の用法について」(広島大学国語国文学会『国文学攷』第百号、1983年
7) 永尾章曹編集『日本語学』に引用されている用例である。(p. 106)
8) 永尾氏は、感応表現においてａｂの両方が解説的な叙述であるとしており、「一分経って」のような時間の経過を示す言葉を付けられないことを、その根拠として挙げている。しかし、感情を叙述する文は、文章内における役割にかかわらず「一分経って」のような時間の経過を示す言葉を付けることはできない。「＊一分たって、彼は悲しんだ。」「＊一分たって、焦燥を感じた。」これは、感情の非動作的な性質が時間の経過を示す言葉を拒否するためである。従って、「一分たって」が付かないことを根拠に感応表現のｂが説明的であると断定することはできない。むしろ、内容から考えた場合、登場人物の心情は登場人物の行動に準ずるものであり、出来事の中に含まれるべきものと考えられる。本稿では、感応表現のｂを出来事の叙述と判断する。
9) 工藤真由美「シテイル形式の意味記述」(『武蔵大学人文学会誌』第13巻４号、1982)
10) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(1984、くろしお出版) p. 133
11) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』p. 135
12) 谷口秀治「テイル形とムードに関する一考察」(平成４年度広島大学教育学研究科修士論文)
13) テイル形によって叙述された事態と、第二の事態との成立時間の関係については別稿で考察する予定であるので、(40) においてこの点には触れなかった。
14) ハラルト・ヴァインリヒ、脇坂豊他訳『時制論—文学テクストの分析』(1982、紀伊國屋書店)

［**出典一覧**］松本清張『点』、『発作』、『Dの複合』、『渡された場面』、『眼の壁』、上住充弘「非自民のガン社会党護憲左派名鑑」（『諸君』1993年9月号）

「付記」本稿は、永尾章曹先生のご指導のもとになったものである。また、本稿のアイデアの直接の契機となったヴァインリヒの『時制論』は、その翻訳者である広島大学総合科学部の竹島俊之先生にお教えいただいた。両先生に衷心より御礼申上げたい。

（平成5年9月1日受理）